報告

「県外研修」長崎方面旅行に参加して

高司良恵
（会員　佐伯市宇山区）

・日　時　平成十二年十月十四日(土)〜十五日(日)
・行き先　長崎市(日蘭交流四〇〇周年)
・幹事(研修部)　小野英治・五十川千代見
・行　程　十月十四日
佐伯駅発〜弥生町役場〜大分米良〜高速道〜長崎着
市内見学
出島史料館〜長崎原爆資料館〜如己堂〜旧香港上海銀行長崎支店記念館〜大浦天主堂〜グラバー園
※宿泊　長崎県自治会館
十月十五日
雲仙経由〜原城〜普賢岳〜島原フェリー〜熊本〜高速道〜大分米良〜佐伯帰着
・参加者
川口昌昭・矢野徳彌・河野信夫・藤田範
宮下良明・市野瀬仁・深田米男・林寅喜
高司佐平・甲斐博志・小野英治・工藤勇
五十川文士・吉田齋次郎・五十川千代見
北野郁・藤田母美枝・小林和子
高司良恵・ドライバー　御手洗幸雄
以上二十名　敬称略
「会員の皆様　来年度は奮って御参加下さい。」

十月十四日、午前七時佐伯発。ベテランドライバー御手洗さんの運転で総勢二十名マイクロバスは、好天に恵まれ県外研修一泊旅行長崎方面へ向かった。

車中、小野幹事さんより日程説明。見学先の資料が配布され感謝でいっぱい。

車は国道十号線を離れ、米良経由大分自動車道を快適に走る。農作業はすでに終わり秋も一段と深まる中、道路に添って「泡立草」の黄色が帯状に咲き続いている。車内はアルコールも少々、お互いに話が弾む。塚原を過

ぎると左側に雄大な由布山が天を衝くように見える。素晴らしい山だ、裾野には早や芒が秋風に揺れている。

「由布山の裾野とりまく花芒」

車は予定通り走り続け、「基山」でトイレ休憩したが、自家用車、マイクロバス、大型バスで駐車場はいっぱい人と人でごったがえしの状況。やっと地元産の枇杷で作ったというソフトクリームを買ったが味は抜群で、とてもおいしかった。

再び車中の人となり、いくつかの村や町を過ぎ長崎バイパス経由で長崎市に到着した。

「ああ！やっと着いた。」時計は十一時を過ぎていた。「出島駐車場」で昼食をとりながら、久々の長崎をなつかしく思い景色に見とれてしまった。

!!赤い花なら曼珠沙華、オランダ屋敷に雨が降る、濡れて泣いてるジャガタラお春……。

長崎物語の切ないメロディーがつい心に浮かぶ。異国情緒の街「長崎」を舞台にした数々のヒット曲、人情豊かな中に哀愁がこもり切ない程心がゆさぶられ淋しさをさそう。

昼食も終わり第一の見学は、国指定史跡「出島和蘭商館跡」であった。鎖国の時代、平戸から長崎出島に移されたオランダ商館、日本と西欧を結ぶ唯一の窓口であった出島。経済文化、学術の交流拠点として、日本の近代化に大きく貢献した出島のオランダ商館は見事に復元され、往時を偲ぶ事ができた。

出島は慶長十四年(一六〇九)ヨーロッパの新興国家オランダは、平戸を拠点に日本との貿易を始めることに成功し、アジアに於ける通商を背景に一大経済大国となったが、寛永十三年(一六三六)、ポルトガル人によるキリスト教布教を禁止するため、幕府は長崎の有力町人に命じて約一万五千平方㍍の人工島を作らせ、ポルトガル人を居住させたのが出島である。

出島は各自　自由に散策見学する。

「異国めく出島商館秋うらら」

①出島史料館本館

貿易と文化という二つの視点から、出島誕生とそのいきさつ、変遷、貿易品や出島での生活、日本と西欧の国際交流の様子を模型やグラフィックパネルで紹介している。建物は明治十年(一八七七)、我が国最初のキリスト

教の神学校として建てられた出島神学校を保存修理した建物である。

②ヘルト部屋

オランダ商館の商館長次席のことを、当時日本人は「ヘルト」と呼んでいた。「ヘルト」という単語はポルトガル語で呼ばれるオランダ人は、果してどう感じていただろうか。二階建てでヘルトの居宅として使われた。

③料理部屋

オランダ商館員の食事を作っていた所で、出島に出入する通詞や役人が、珍しい西欧料理を家族にお土産として持ち帰り、大変喜ばれたという。

④一番船　船頭部屋

オランダ船船長が貿易の期間滞在する部屋で、室内には嘉永四年(一八五一)に来航したオランダ船船長デ・コーニングの「私の日本滞在記」などを参考に、オランダ本国やバタビアから持ち込んだ家具、そして船長の日用品を展示している。

⑤一番蔵

当時は主に砂糖を収蔵していた蔵で、二階建ての土蔵で風雨・火災・泥棒から蔵を守るための工夫がなされていた。砂糖の収蔵とはちょっと驚いたが、カステラがすぐ頭の中をよぎった。出島復元には伝統工法が各所に用いられているが、今回の復元工事の過程や技術をここで見ることができる。壁には市民から寄付された「蚊帳」が埋め込んでいるという。

⑥二番蔵

十九世紀初頭に出島の西側に建てられていた土蔵で、主に輸入品の蘇木を保管していた。一階は輸入品「スオウ」、出島を通して伝えられた西欧の言葉、出島のエピソードについてパネルや映像で紹介している。二階は「阿蘭陀渡りと工夫」「長崎からの西欧科学」など西欧からの技術や学問を当時の日本人が、どのように吸収していったかを見ることができるし、「幻燈機」「のぞき眼鏡」「星鏡」など西欧の科学機器を模型で再現している。限られた見学時間内に、国指定史跡「出島和蘭商館跡」・外国人居留地跡・商館・倉庫・洋館・石

唐蘭館絵巻より

畳・側溝など、往時を偲ぶことができた。「唐蘭館絵巻」川原慶賀筆による絵から、出島に生きる女性の姿を垣間見ることができる。胸に迫るものがあった。

「復元の出島商館異国めく南蛮文化に往時を偲ぶ」

〔復元された建物〕

次の見学は「如己(にょこ)堂永井隆記念館」。博士が晩年を過ごした旧居、数々の遺品に心が痛む。博士の著書が脳裏をかすめる。色あせたロザリオの鎖に万感一入迫るものがあった。

如　己　堂

引き続いて長崎原爆資料館に行った。

被爆の惨状をはじめ鼻のとれた天使の石像、十一時二分で止まった時計、閃光で戸袋に残る物干し竿と肌着の影、目に映るもの全てが原爆の恐ろしさを物語る。原爆が投下されるに至った経過、被爆から現在までの長崎の復興の様子および核兵器開発の歴史、平和希求などストーリー性を持たせた展示形態、原爆・平和関係の図書約一万冊が閲覧できる図書室などの施設もある。

※ひたすら勝利を信じ学徒動員で精出していたあの日、ピカッと光ったら上を見るな。すぐ防空壕へ入るんだ。

「ピカドン」これが原子爆弾、広島・長崎の惨情は全然わからなかった私達の青春だった。

長崎研修第一日目の最後の見学地へ

見学した所

・旧香港上海銀行長崎支店
・大浦天主堂
・グラバー園
・坂の石畳

◆香港上海銀行長崎支店

明治三七年建造された洋館
一階はカウンター、当時の銀行の様子を伝える
二階は喫茶室
三階は長崎・上海航路・貿易港長崎の歴史的資料展示

旧香港上海銀行長崎支店

◆大浦天主堂

日本最古の木造ゴシック様式献堂式の天主堂、別名フランス寺。百年前にフランスで作られたというステンドグラスから入り込む光の美しさに心奪われる。玄関正面のマリア像は、四〇〇年の永い間潜伏していた信者が、秘かにプチジャン神父に名乗り出たことを記念した碑。

大浦展望公園

大浦天主堂上から港を望む

◆グラバー園

長崎を一望できる高台に位置する長崎観光名所No.1スポット。スコットランド出身の貿易商トーマス・B・グラバーが接客用サロンとしていた。園内はロマンティックな雰囲気。

おなじみの長崎の観光コースになっているので、当日も人・人・人でいっぱいだった。

「秋天に十字架高く教会の
ステンドグラスの窓はあかるき」

長崎名物「卓袱（しっぽく）」料理の由来について

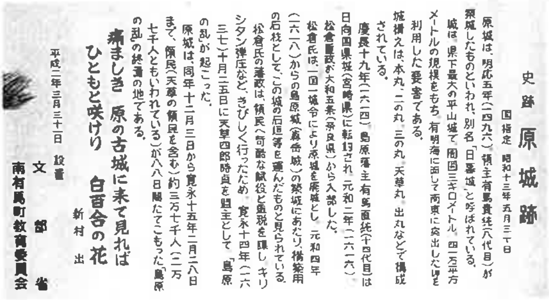
長崎の人達が、元禄の頃町家に止宿していた唐人達の料理法を見て、家庭料理にとり入れたものと言われている。その後次第に長崎風に調和され、オランダ料理に日本料理の特徴を取り混ぜた長崎独特の献立となった。朱

塗りの円卓を普通六人から七人で囲み大鉢・中鉢・小菜とよばれる大小種々の皿に、海・山の幸の料理が盛られ会食形式で品数は全て奇数にする習わしがある。
　正式な卓袱料理の形式ではなかったが、会館の方の心温まるもてなしの料理に、長崎の味を十分にいただくことができた。

第二日目

雲仙経由～原城～普賢岳～島原フェリー～熊本～高速道～大分米良～佐伯帰着
　全員元気で七時過ぎ宿舎を出た。交通網の感違いがありアクシデント。海辺の町をひとまわり。又、もとの宿舎の所に戻って来たが、途中、車窓より見た「枇杷畑」「じゃがいも畑」の生産地を目のあたりにし、その規模の大きさに、ただただ、驚きの目を見張った。雲仙経由一路「原城」に向かった。
　「有明の海に向かいて碑文読む天草四郎雄雄しき姿」

◆普賢岳を仰ぐ
「百聞は一見にしかず」普賢岳の峰が、澄み切った青



空に突きささる様に聳える。その雄姿を真向かいにして立った私は、なぜか身の竦む思いがする。土石流に人を家を田畑を一瞬に飲み込んだ悲劇、誰が予測したであろうか自然災害を!!まだまだあちらこちらに残る土石流の傷跡に、溜め息と犠牲者となられた方、又その御遺族の心境を思う時、胸が痛む。

再び仰ぐ普賢岳、私にとって今回の研修旅行の大きな感動を覚えたひとつだった。過日NHKテレビで、復興に立ち上がる取り組みが放映され深く感銘を受けた。島原半島・雲仙普賢岳、再びこの様な災害が起らぬ様、祈る気持でいっぱいであった。

◆島原フェリーから熊本へ

いよいよ旅も終わりに近くなった。真白いフェリーの後の方に席をとる。静かな海原に白い航跡の帯を残して船は進む。真平らな海、普賢岳に向かって合掌する。突然ざわめく人声、高校生だろうか。男の子達が手に「えびせん」の菓子をちらつかせている。どこから集まって来たのか、沢山の「かもめ」が餌を求めて乱舞する。差し出す「えびせん」の菓子に向かってタイミングよく餌をとる。「うわあ」その度に歓声があがる。ちょっとユニークな船の一幕であった。

張りめぐらされた養殖海苔場をあとに、フェリーは無事熊本に到着。再び車中の人となり、高速道を走り続けた。

二千年最後の研修旅行は「日蘭交流四〇〇周年」長崎

の旅に視点をあわせ、日本の近代文化に貢献した出島を中心に長崎市内・雲仙島原(原城・普賢岳)と、有意義な研修旅行は好天に恵まれ楽しい二日間であった。見学時間に限りがあり、「維新への道」龍馬ゆかりの地・日野江城を訪ねることが出来なかったが、又の機会を期待している。

暮色につつまれる弥生・佐伯につつがなく帰着出来たのも研修部小野・五十川さん、安全運転の御手洗さんにあらためて深謝。ありがとうございました。

◆『弥生町の石造物』

弥生町教育委員会
平成十一年二月刊　B5版　三〇頁

本書は五十川千代見弥生町文化財調査委員・佐伯史談会員の調査報告をもとに、町指定文化財以外の石造物について弥生町文化財調査委員会が企画・編集したもの。

石造物の造立年代は南北朝期から明治期に及ぶ数百年間で、五輪塔・宝塔・宝篋印塔・一石一字塔・庚申塔・萬霊塔・板碑・地蔵塔・地蔵供養塔・十三仏像塔・役行者・鍾馗・大臣塔・天八達之衢神・キリシタン墓・十六羅漢像・性器塔・佐伯惟治供養塔・虫供養塔・海會塔・比翼塚・一乗妙典塔・祖母神像・高野家之塔・道標・燈籠・狛犬・石殿の二七石塔を解説・紹介している。

本書の「はじめに」次のような説明がある。「造立の目的は、ほとんどが信仰に関係するもので、しかも石造を造立した人が地方の支配者ではなく、当時の百姓集団で食うや食わずの貧しい暮しの中から少しずつ浄財を積み立て造立したものが数多く、民衆による汗の結晶である。(中略)貧しい生活の中にも信仰に根ざした素朴な生活の営みと、ゆとりのこころが感じとれる」と述べている。また、「草藪に埋もれた状態で破壊の進んでいるのが多数見受けられた。遠く先祖から守り通して来た貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことが私達に与えられた義務ではないか」と述べている。

本書は石塔の写真のほか、所在地・所有者も付記している。

(矢野)